

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/labo/>



題名「元浅草ドクターイエロー！」

♡作品解説♡

貼り絵でみんなの大好きなドクターイエローを作りました。紙を切る係、貼る係としっかり分担してきっちり仕上げました。
(スマートキッズジュニア元浅草)

LD(読み書き障害)のある子供のためのICTを活用した学習支援(2)

河村 久(聖徳大学)

このテーマについては、53号でLD研究におけるICT活用に関する研究動向を振り返りつつ、今後の研究課題として丹治(2022)が整理している課題を紹介しました。本稿では、上記の研究動向を踏まえ、ICTを活用した支援方法の具体について述べたいと思います。

文字や文章を読むことの困難の背景には、①文字の形を正確にとらえことが難しい、②文字が表す音を想起することに時間がかかる、③文字の連なりから単語(文節)のまとまりをとらえ、意味を理解することが難しい、④行末から次の行頭への視線の移動がうまくいかない(眼の使い方が上手にできない)、⑤どこまで読んだかを覚えていられない(短期記憶・ワーキング・メモリーの弱さ)など、様々な要因が関係していることが分かっています。

個々の子供の読みの困難さの背景に着目して、流暢に読むために必要な能力の伸長を図る指導は、通常の学級に在籍する子供の場合は主として通級による指導において行われます。在籍する通常の学級においては、通級による指導とも連携しつつ、読みの実態に応じた配慮を行っていくことが求められます。これまでも、小学校低学年でつまずきやすい特殊音節(拗音、促音など)の読みの実態を把握し、系統的に指導を行っていくMIM(海津ら)を指導に取り入れている学校もあります。また、③の場合は文節ごとに／を入れて、言葉のまとまりをとらえやすくしたり、④の場合は1行分だけ穴を開けた厚紙を使い、行ごとに移動させて他の行が見えないようにしたりする指導の工夫が行われてきました。

通常の学級においては、さらに集団での学習場面で使える実用的な支援方法が求められています。そこで、従来から行われてきた取り組みと合わせて、ICTを積極的に活用していくことが大切となっており、そのための環境も整いつつあります。

例えば、特別なパソコンやタブレット、特別なアプリを使わなくても、既に備わっている音声読み上げ機能を使いこなすことが考えられます。読み上げ速度を調節することで、自分にとって理解しやすい調整が可能です。初めからデジタル化されていない紙媒体の資料でも、OCR機能を使いデジタル化すれば対応できます。このことで、子供はイヤフォンを使って聞き取り、授業の展開についていくことが可能となります。

また、デジタル教科書では、文字の大きさの拡大縮小、行間の広さ、1行の文字数の調節、読んでいる部分にハイライト付け、白黒の反転、音声読み上げ機能、総ルビなど、自分にとって最も読みやすいテキストにすることもできます。学習者用デジタル教科書の購入はこれまで有料となっていたが、文部科学省は令和6年度から全ての小・中学校等(特別支援学校小学部・中学部、特別支援学級を含む)を対象として、英語のデジタル教科書を提供することにしており、続いて算数・数学のデジタル教科書を段階的に提供していく予定としています。デジタル教科書の活用方法等については、福井県特別支援教育センターが作成した『読み』や『書き』に困難さがある

児童生徒に対するアセスメント・指導・支援パッケージ(増補版)』(令和2年度)に現在発行されている小・中・高等学校のデジタル教科書に即して、それぞれの機能、活用事例等を導入方法も含めて具体的に紹介しています。

デジタル教材については、日本障害者リハビリテーション協会などがDAISY(Digital Accessible Information System)規格に適合したマルチメディアデジ教科書を提供しているほか、音声読み上げ機能や読み上げ箇所のハイライト表示等を同時に行える児童用一般市販図書を作成・提供しています。マルチメディアデジ教科書を利用した効果として、「以前は、文字を拾い読みしていたが、言葉のかたまりとしてとらえられるようになった。」、「デジ教科書で予習をすることにより、音読がスムーズにできるようになり、みんなの前で読むことへの抵抗が減った。授業に自信をもって取り組むようになった。」などの報告が、先の福井県の資料で紹介されています。

さらに、聴覚優位の子供向けやくりかえし書いて練習するのが苦手な子供向けなど認知特性や学習特性に応じた漢字の読み書き学習用の教材など様々な教材アプリが開発され、市販もされています。

読みの困難には、書きたいことが文章化できない、語彙が少なく限られた表現でしか文章化できない、文章の構成をすることができないといった課題のある子供もいます。こうした子供たちに対するICTを活用した支援については、東京都教育委員会が作成した「ICT活用事例集」(2017.3)が参考になります。タブレットの写真機能を使い、作品の一番見てほしい所を選択させ画像にすることで相手に伝えたいことを焦点化させた実践や、マインドマップアプリケーションを使って考えを視覚化することで、長めの文章でも見通しをもって書き上げることができたという実践など、参考となる実践事例が掲載されています(下記参考文献参照)。

個々の子供の読み書きの困難に対応した支援のためにICTを通常学級で活用するためには、いくつか留意しなければならない点があります。その第1は、学習者本人が使ってみようと思い、自分にとって学びやすいと思える方法を自己選択できるようにすることです。指導者側がおしつけても効果は期待できないと思われれます。また、保護者の理解を得ておくことも必要なことです。第2に、学級の他の子供たちの理解です。ICTを使った学習方法が特別のことではないという授業方法が普通の授業でも行われていれば、他の子供たちも別に気にすることもなくなるでしょう。授業改善の取り組みがまず大切だと思います。第3に、学校全体での組織的な取り組みを進めることです。教職員間での理解と協働実践に取り組みましょう。

参考文献

筑波大学「発達障害のある子どものためのICT活用ハンドブック(通常の学級編)」平成25年度文部科学省調査研究委託事業

福井県特別支援教育センター『「読み」や「書き」に困難さがある児童生徒に対するアセスメント・指導・支援パッケージ(増補版)』(令和2年度) 福井県特別支援教育センターホームページで公開。

(<http://www.fukuisec.ed.jp>)

東京都教育委員会「ICT活用事例集」2017.3

(https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/document/special_needs_education/files/guideline/ict02.pdf)



<プロフィール>

河村 久(かわむら ひさし) 聖徳大学 教育学部教育学科長・教授

私は、現職に就く前には東京都の公立学校の教員、小学校長・幼稚園長として、主として障害のある子供の教育に従事してきました。

この間、全国特別支援学級設置学校長協会会長(平成19年度)、中央教育審議会専門委員(平成18年度～平成23年度)等を歴任しました。近年は、特別支援学校の学校運営のお手伝いをするとともに、通常の学級に在籍する発達障害のある子供の教育に関する研究や現職の先生方への支援にかかわることが多くなってきました。

本 研究所の活動に参画することによって、生きにくさを感じている子供たちの発達支援と生活の充実のためにお役に立つことができれば、大変幸せなことと思っております。